

神道政治連盟国会議員懇談会
活動報告

「皇位」と「象徴」
―皇室の制度を考える―



神道政治連盟国会議員懇談会
活動報告

「皇位」と「象徴」

―皇室の制度を考える―

ごあいさつ

昨年八月、天皇陛下は「象徴としてのお務めについて」直接国民に向けてお考えをお述べにされました。政府は「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」を設置し、識者の意見を求めるとともに、国会では譲位を可能とする法整備に向けた政党間の議論の取り纏めが行われ、「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が制定されました。今後は皇位継承の諸儀式が皇室の伝統に則り執り行われることが望まれます。神道政治連盟国会議員懇談会では、神道政治連盟の協力の下、「皇室」をテーマにした勉強会を随時重ねて参りました。「象徴」や「皇位」をはじめ、大嘗祭の歴史と意義や現在の皇室祭祀についての勉強会を開催し、天皇陛下の御存在について、会員相互で理解を深めて参りました。此度、勉強会の議事録を取り纏め、報告書を発行する運びとなりました。神道政治連盟国会議員懇談会会員はもとより、神社関係者をはじめ、多くの皆様に御高覧戴き、皇室の制度を考える上での一助にして戴ければと存じます。

結びにあたり、御多忙のところ御講演を賜りました先生方に御礼申し上げ、御挨拶といたします。

平成二十九年六月吉日

◆ 目次

| | |
|---|-----|
| 平成二十九年四月十一日(火)勉強会 報告／講師 藤本 頼生先生(國學院大學准教授) | |
| 「『象徴』と『皇位』のあり方を考える」 | P01 |
| 平成二十九年五月十一日(木)勉強会 報告／講師 齊藤 智朗先生(國學院大學教授) | |
| 「大嘗祭の歴史と意義」 | P21 |
| 平成二十九年五月十六日(火)勉強会 報告／講師 山田 蓉先生(元宮内庁掌典次長) | |
| 「現在の皇室祭祀」 | P41 |

「象徴」と「皇位」のあり方を考える



昨年八月に、天皇陛下が「おことば」を述べられて以降、政府、国会では、陛下の生前の「譲位」の問題が整理され、一定の結論が出されようとしています。一方、象徴天皇制のあり方についての問題は解決していません。この点も含めまして、本日は「象徴と皇位のあり方」についてお話しをさせて戴きます。

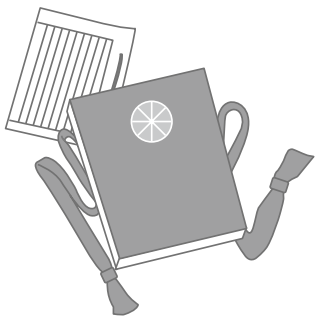
岩波新書に鈴木正幸氏の著した『皇室制度』という本があります。これは平成五年に雅子妃殿下が皇太子殿下と御成婚あそばされた際に書かれたものですが、その「あとがき」に「生きたものとして皇室制度をとらえるならば、戦前と戦後の皇室制度、そこにおける天皇を皇室のあり方を断絶か連続かの二者択一的にとらえる発想は、かならずしも有効ではない」と書かれています。その意味では、国家と社会の枠組みを定めた明治憲法や現行憲法、皇室典範のあり方を如何に考えてゆくかという中で、皇室制度を「生きた皇室制度」として理解し、もう一度、皇室制度に目を向けるということが、今問われています。そういった点を踏まえ、神社神道を研究する立場から、若干の私見を述べさせて戴きます。



◆「象徴」としての天皇を考える視点

先程もお話しさせて戴いた通り、象徴天皇制のあり方という問題は現在も残っています。その中で陛下がどのようにお考えになっているかという点については、昨年八月の「おことば」が参考になると思います。「おことば」では、「伝統の継承者として、これを守り続ける責任に深く思いを致し、更に日々新たに日本と世界の中であって、日本の皇室が、いかに伝統を現代に生かし、いきいきとして社会に内在し、人々の期待に応えてゆくかを考えつつ、今日に至っています」と述べられています。また、平成二十一年四月八日の御結婚五十一年の記者会見では、「象徴とはどうあるべきか」ということはいつも私の念頭を離れず、その望ましいあり方を求めて今日に至っています」と述べられています。更に、平成十年十二月十八日の六十五歳のお誕生日会見では、「日本国憲法で、天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であると規定されています。この規定

と、国民の幸せを常に願っていた天皇の歴史に思いを致し、国と国民のために尽くすことが天皇の務めだと思っています」と述べられています。御即位の際に、「憲法を遵守し」と仰せられたことは有名な話ですが、象徴としての天皇を考える視点の中で、「伝統」という言葉、また、「象徴とはどうあるべきか」、「天皇の歴史に思いを致し、国民の幸せを常に願ってきた」ということなどが一つのキーワードとなってくると思います。そういった中で、今後立法府で議論される「退位」「譲位」の問題を考える上でも大きな意味があると思いますが、一方で、天皇の基本的性格を規定するキーワードである「象徴」という概念については、国民の間にどれだけ共通の理解がなされているかと言え、国民の数ほど、つまり一億通りあるといっても過言ではなく、今もなお、共通の



理解を得るということは非常に難しい部分があると考えます。実際に、学術的には、法学者や歴史学者、神道学者などでも、様々な象徴天皇論が跋扈している状況にあります。そういった中で本日は、大きく分けて「二つの視点」からお話しをさせていただきます。一つは、法学者の理論ですが、法学者の園部逸夫先生の論です。園部氏は、「天皇は、象徴である」という意味をどう考えるか」、「象徴は、天皇である」という規定でないことの意味をどう考えるか」という二点について考察しています。また「天皇が象徴にふさわしいとするさまざまな考え方」についても検討をしています。これについては、大原康男先生が平成五年に書いた著書『象徴天皇考―政治と宗教をめぐって』の中で考察している「象徴とはどのような規範的意味をもつのか」という部分にも繋がってくると思います。どういうことかと言いますと、「象徴たるべきものとは、どうあるべきか」という規範的な考え方でして、「いかなるようになるれば「象徴天皇」であるのか」ということですが、一

方で、現憲法下の中では「象徴は天皇である」とは明記していません。つまりは、他にも「象徴」はあるというわけです。天皇は「象徴」であるわけですが、他にも有形・無形の象徴が存在するわけで、法学者の中では、「天皇が象徴」であるとされていない規定をどう考えるか」という問題が出てきます。しかし、陛下が伝統や歴史を重んじ、国民の幸せを祈り続けて来られた中で、皇位が長く続いていることから、天皇は象徴であるという考え方、また、天皇と国民の関係に基づいて、象徴であるとする考え方、が既に検討されてきています。これ以外にも、大原氏は「象徴という語はどのように採用されたか」、「象徴の根拠は何か」「象徴天皇にはどのような行為が予定されているか」「象徴天皇制を支える国民意識とはどのようなものなのか」という点についても考察しています。この中で、まず「象徴」という語はどのように採用されたか」ということですが、これは、現行憲法・皇室典範制定にGHQが大きく関与したことは、歴史的に見ても明らかです。そ

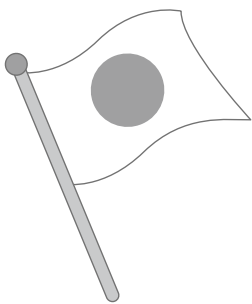
の由来も明らかにされており、米国大使のグルーの影響があったということや、GHQ民政局次長のケイデイス大佐の影響があったことが指摘されています。また、「象徴」という語がどうあるべきかということですが、大原先生は、象徴天皇制における「象徴」とは「聖なる語」に近いニュアンスを持つものであり、先程の園部先生の話にも出てきますが、①象徴たるべく行動すべしと要求する側面、②象徴たるべく仰戴すべし、という両方の側面を持っているものと指摘しています。その中で、「象徴」とは、天皇が国民とは異質の超越的存在であることを当然の前提としており、その「象徴」たる資質を保全するものが、「宮中祭祀」であると説明しています。実際に大原先生は、参考人として招致された「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」でも、宮中祭祀が天皇の行為の内「その他の行為」と分類されていることに疑義を示しており、「宮中祭祀」は「国民統合」の精神的基盤となす公的行為であるという意見を主張しています。象徴とは動態的

な概念であり、単なる「印」のような存在概念の象徴ではないとも指摘しており、「象徴」とは情念の容器であるとして述べています。

◆ 国会答弁にみる

「国民統合の象徴」と従来の学説

先程、「象徴」とは「聖なる語」であるとお話ししましたが、そもそも「象徴」という言葉が、法学的な用語ではないということがもう一つの問題としてあります。つまり、そもそも法律用語ではないので、法律学者からしてみれば、その理解に苦労が絶えなかったわけであり、憲法条文において用いられた事例はきわめて稀であって、定義をいかにつけるかは、非常に難しいものであると考えられてきました。法学者であっても難しいことですから、



一般の国民にとってはなおさら難しいわけです。

「象徴」とはいわゆる「シンボル」であるということですが、これについては、金森徳次郎国務大臣は、憲法改正の議論の中で、「あこがれ天皇」という論を持ち出しています。「象徴」たる天皇の地位を法学的に考えるのであれば、実際には、憲法上、象徴天皇としての行為を明記しているわけではありませんので、国事行為の中で、象徴としての行為について見てゆくしかありません。憲法で、天皇の地位は「国事行為のみを行う」と限定されており、形式的・儀礼的な権能ということには、非常に消極的であり、かつ受動的であるということが、現在の憲法下における天皇の地位であるということになってしまいます。つまり、現行憲法が、天皇は「象徴以上の何者でもない」としたところに、まさに問題があるわけです。これが象徴天皇制の一つの問題であると言えるところですが、これについては、葦津珍彦先生もすでに指摘しているところです。そうは言いながらも、実際には、昭和天皇、今上陛下が、憲法

に定められた国事行為に限定された行為だけを行ってこられたかといえば、そうでないことは、本日参会の先生方も御存知と思います。国事行為以外にも、「公的な行為」や「その他の行為」があります。一方で、昭和天皇は内閣からの「内奏」を受けておられました。つまりこれは、理解・判断が非常に難しい問題ですが、実際には、後藤致人氏も指摘している通り、この「内奏」が単なる受け身のものとして捉えられないものであり、憲法が定める象徴天皇制からは、大きく逸脱をした行為であると言えます。今上陛下におかれましても、「内奏」をされているわけで、その意味では、政治的な権能というわけではありませんが、実際には、天皇の権能から逸脱をした行為をしているということになります。

また、「象徴」としての行為をどう考えるかについて、国会答弁の中では、「象徴たる天皇は元首である」という答弁もあります。実際に海外と比較して考えても、「王位」をシンボルとしている英国の例もあります。実際には、「英連邦加盟国の統一」のシ

ンボルという見方と、日本の天皇とは少し違っており、ところがあると思います。

◆ 神道学者上田賢治の示した

「象徴」と「皇位」の意味

象徴としての天皇の行為をいかに捉えるべきかということですが、神道神学が専門の上田賢治先生は、「象徴」という言葉が「日本人にとって、極めて新しい造語、或いは翻訳語として用いられ始めた事実」に由来する。従って、サイン（信号）との分別を失い、これと混同する誤解をさえ生むことになった」、「事の本質はむしろ、この理念が持つ真意を、国民に正しく教育し、意識的に自覚まで高めるための営みにこそかけられてある、と言ってよいのである」と述べています。

上田先生は、その中で二つの問題を指摘しています。一つ目の問題は、我が国民にとっては、未知の国家イメージを造り出した「象徴」の意味をいかに考

えるかということです。その意味では、「日本人にとって、天皇はどのような御存在か」ということについて考えることになるのですが、上田先生は、象徴規定というものは、現憲法にあるけれども、一方で天皇には「現御神」であられる部分があると指摘しており、その具体的な御存在そのものに、「民族の統合と日本の文化的伝統を荷う「国家」という、価値そのものを見て来たという事実があると述べています。天皇は、神話以来の文化的伝統を荷う国家そのものの価値を背負う「現御神」としての存在として捉えるべきだという自身の考えを述べています。もちろん「現御神」云々の議論になりますと、天皇の人間宣言といわれる昭和二十一年の「元旦詔書」を盾にして、天皇を神と称えごと申す日本人の信仰伝統を否定することは、至極簡単ですが、しかし、それを簡単に否定することは、極端な例ではありませんが、「日本人が自ら日本文化の伝統を放棄し、民族ごとキリスト教に改宗することを宣言したことにさえなりうる」と上田先生は述べています。

また、「神学的な基礎として考えるのであれば、天皇は、ニニギノミコトの直系の子孫であり、系譜を継承することによって存在、生命の意味の成就があり、そしてその民族共同体としての祭りを祖宗の祭りとして継承してきました。その意味では、我々日本人が自らを神の生みの子、神々の子孫として自覚し、神話に登場する神々、祖先代々の霊を、神霊として祭祀してきた歴史によっても確認することが出来ます。国家祭祀としての天皇祭祀の成立は、歴史的に部族祭祀として行われて来たものの統合、その基盤の上に成立し、その祭祀を構造的な原型とするものであるということは、考えてゆくべきである」と述べています。二つ目の問題は、現憲法の第一条が象徴天皇の地位を、主権者たる国民の選択にゆだねるが如き文言をもって結ばれている点を指摘しています。主権者によって基づかれていますという点は良いのですが、現憲法の「主権者たる国民の総意に基づく」の部分が、英訳では「国民の神聖なる意志に基づく」とされています。つまり、「象

徴の意味如何」ということについても、併せて考えなければならぬと思います。

◆ 葦津珍彦の「象徴」たる 天皇の地位にかかる論究

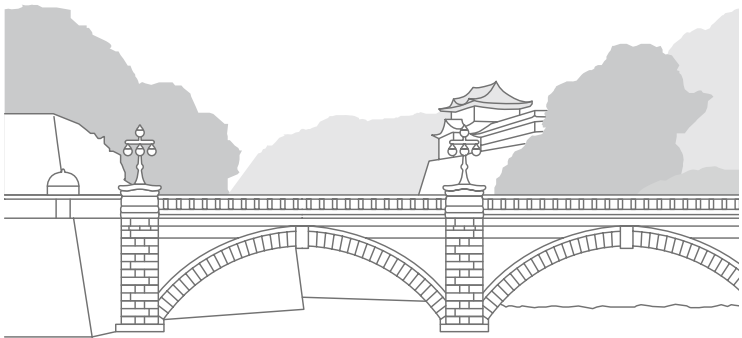
上田先生が指摘した、第二の問題については、実は、葦津先生が既に指摘をされていました。葦津先生は「常に新しき生命を以てその最高の地位を保たれた。旧い政治制度が変革され、新しい制度が樹立されても、国の象徴は常に天皇であつた」、「日本の象徴としての天皇は、常に統治者として仰がれたのであつて、この国史の事実を無視して、ただ象徴としての空名を与えたのが現行憲法である」と述べています。天皇が日本国の本来の統治者として仰がれて来たという事実と、天皇が日本国の象徴たりしは不可分の関係であつて、現在の憲法は、この不可分を無視して、最高祭祀者としての天皇の地位を否定し去る時に、天皇の地位は果して何を

るような時には、天皇の国政上の権能が有効に作用して、国民の統合をもとめることができるようにしておかなくてはいけない。この点を無視したところに、現行日本国憲法のもっとも大きな欠陥があるといわねばならない」と述べています。その中で葦津先生は、天皇の精神的権威、日本国の精神的基礎を固めなす上で、大切なものとして、歴代の皇宗に対するお祭りである「宮中祭祀」をかかげています。天皇の祭儀によって建国の精神を回想し、光輝たる国史の印象

根拠として保ち得るのか、歴史にのみ存するといわれるかもしれませんが、それだけではないと、葦津先生は指摘しています。

現憲法第一章で「天皇」としているわけですが、その意味では、現憲法において象徴天皇をいかに考えるかという問題は解決しておらず、この点を正してゆくことは大事なことです。ただ「象徴」なる語を用いて、主権の存する国民の意思に基いて定まるとすることは、歴史を断絶して考えることでもありません。断絶して考えるのではなく、天皇の地位は悠久なる万世一系の皇統、連綿たる歴史的事実の中に、その根源を有するものであり、それは、皇祖の神意神勅に根拠を有するものという点も考えてゆかなければなりません。私も、葦津先生の考え方は非常に素晴らしいものであると思いますが、天皇の精神的な権威を決して失ってはならない、そういうことを無視して、象徴天皇制の議論はしてはならないと思っています。

さらに葦津先生が「国論が分裂して困難を感じ



を新たにして、日本国憲法が国家の精神的基礎を固め成し、国民の精神を統合してゆくためにも貴重なおつとめであると指摘しています。その祭儀の執行を国の天皇としての御資格でなさることが禁じられて妨げとなっている現行憲法については、「とかく紛議のおこる余地のないように、天皇が天皇としての御祭りの御執行が滞りなく出来るように、ぜひ憲法の姿を正していただきたいと思う」と述べて、積極的に神社界から声をあげていたという経緯があります。

その意味では、葦津先生は、皇室祭祀の国事としての重要性を指摘し、天皇の最も大切な務めが、皇祖皇宗の御祭りであるということ、そして皇祖皇宗の祭り主たる天皇の御存在こそが、日本人の精神的基礎を不動たらしめる最高の力であるとも述べています。葦津先生とは全く考え方、方向性の違う方ですが、津田左右吉氏は「国民的精神の生きた象徴であられるところに、皇室の存在意義がある」と指摘しています。また、生きた象徴

為ということを考える上で、やはり看過できない問題と指摘しています。更に、「宮内庁では、宮中祭祀と言っていますが、皇室においての皇室祭祀というのは、単なる私事ではなくて、宮中における公のこととしておられるわけで、内廷において内廷費でもって賄われています。実際に、宮内庁のホームページでも、「宮中のご公務など」ということで、「宮中祭祀」と書かれており、決して私事、私的な、プライベートなことではないだろうというふうに思っています」と述べています。象徴天皇は現行憲法では主権者たる国民の意思によって規定されるとしても、天皇そのものは歴史的な経緯の上で存在するということを決して無視してはいけない、そしてその精神的権威も歴史的には、百二十五代、二千年にわたる長い歴史の中で形成されてきたものです。その意味で、天皇が天皇たる由縁は、一体、どこにあるのかという問題をきちんと把握しておくことが大事であると言えます。

象徴天皇たる前に天皇は存在しており、その天

としての精神的基礎はどこにあるのかと考える中で、皇室祭祀の存在を抜きにしては語れないと述べています。

◆「皇位」の皇位たる由縁と根拠

國學院大學の阪本是丸教授は、かつて朝日新聞社の『AERA』誌に「皇室は決して憲法によって存在するのではなく、憲法ができる前から伝統として存在する」と述べており、「現行憲法においても「第一章 天皇」ということで始まっており、この点からやはり歴史的背景を無視して語れないというふうに考えている」と、参考人招致を受けた参議院憲法調査会で発言しています。阪本先生は、美濃部達吉先生の著書にある「祭祀大権」についての戦前・戦後の考え方を指摘しており、「公私に二分する考えではなく、皇室の祭祀というものを、如何に国民が位置づけるかということに意味がある」と述べ、天皇の制度或いは象徴たる天皇としての御行

皇の地位と精神的権威、皇位の連綿たる由縁、根拠というのは、皇祖の神意神勅に根拠を有するものです。そして、天皇が天皇たる由縁、伝統として存在している由縁は何かと考えますと、神道史の立場に立つて見れば、一つは三種の神器を受け継ぐという点です。今上陛下の時、つまり昭和天皇が崩御あそばされた時、最初に行われたのは「剣璽等承継の儀」でした。そういう意味では、鏡と剣と玉を受け継ぐということが大事であり、これこそがまさに天皇が天皇たる由縁であります。

もう一つは神勅に基づくという点であります。実際に日本の正史として編纂された、六国史の一つ『日本書紀』においては、「天壤無窮の神勅」、「宝鏡奉斎の神勅」、「神籬磐境の神勅」が示されています。「天壤無窮の神勅」では、天照大神の子孫が永遠に君臨すべき大原則が大神自身によって神代のはじめから定められ、約束されているとありますが、まさに皇位が百二十五代続いているという事実があるわけです。また「宝鏡奉斎の神勅」では、この

鏡を私だと思って祀り、御鏡の祭りを受け継いでゆきなさいとあり、神宮に奉祀されている三種の神器の一つ、八咫鏡がそうですが、神勅に基いて、今も丁寧に祀りが続けられています。

三大神勅ではありませんが、同様にして下された「神籬磐境の神勅」では、神籬と磐境を立てて、わが皇孫のためにお祭りをしなさいとありますが、実際に歴代の天皇が皇孫のために祭りを行ってきたという歴史があります。まさに宮中における祭祀がそうですが、皇祖玄宗を含め、国安かれ、民安かれと国家国民の安寧のための祈りを、これまで天皇は続けて来られました。天皇の御代が変わっても、仕える人が変わっても、常に恒例の祭祀を繰り返し繰り返し続けてゆくことに、一つの大きな意義があると言えます。もう一点は順徳天皇が鎌倉初期に、神事儀式について記した『禁秘抄（禁秘御抄）』という書物の中で、まず冒頭に「一、賢所、凡そ、禁中の作法、先づ神事、後に他事、旦暮敬神の叡慮懈怠無く」と書かれています。宮中の作法ではまず神事が

け的な考えではないかと言われますが、私は、色々な物をすべて無くして、新しいものに替えてしまうという意味の「あたらし」ではなく、この歌で皇室の弥栄を祈り、言祝ぐために「あらたし」と詠んでいるところに意味があると思います。宮中の祭祀も神社祭祀もそうですが、常に代が替わっても「あらたし」く、お祭りが続けられてきたということは、「象徴」としての天皇、皇位の意義を考える上でも重要な点になるものと考えています。

❖ おわりに

ここまで述べたように、どのように象徴天皇制を考えるかということの問題は現段階では解決していません。「象徴」と「皇位」ということをどのように考えてゆくかという中では、その根源を有する神意神勅というものの、宮中祭祀というものを如何に考えるかは非常に大事なことでありと言えます。精神的基盤、精神的権威を保ち、天皇が天皇とし

大事で、次に他事であるとされています。その意味で、陛下が宮中祭祀を非常に大事にされておられるということが分かりますし、伝統を受け継ぎ、その根本を変えず続けておられるということです。国の変遷で部分変化したところはあっても、その根本は変えられることなく、継承されてきているということに一つの意味があるのです。

❖ 「あたらし」と「あらたし」

『万葉集』の編纂者である大伴家持が『万葉集』の最後に歌った一首に、雄略天皇の成婚を通じて天皇の御代の栄を予祝する「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」という歌があります。この歌では「新しき」を「あらたしき」と詠んでいます。そもそも中古以前は、「あたらし」を「あらたし」と詠んでいました。そのため、この和歌でも「あらたし」と詠んでいます。古語、国語学的にみれば、中世から変化したものであるため、ある種のこじつ

であるためには、どのような条文が必要で、どのような考え方が必要であるのかということについて、先生方にも是非お考え戴きたいとおります。

質疑応答



Q1

日本国憲法の文言上との兼ね合いのことで質問をさせて戴きます。憲法二十条三項に、国または国の機関は宗教的行為をしてはならないと書かれていると思いますが、もし天皇陛下の象徴としての役割の中に、宮中祭祀を強調するのであれば、二十条三項との関係はどのように考えたらよいのでしょうか。

A1

非常に難しい問題です。考え方の解釈を変えてゆかなくてはならないという御指摘なのかもしれませんが、実際に昭和五十二年の津地

A2

御存在であるという見方をすべきではないかと思っていますが、そもそも大日本帝国憲法を含めて、天皇を憲法という欧米的な法体系で、規定することに無理があるのではないかと思っています。このように申すのは、もともと天皇のお役割については、明治から定められ始まったわけではなく、百二十五代連綿と続いていて、その役割は宮中祭祀が主であります。天皇は、天上界と地上界を結び存在として、国民の平和を祈って来られました。憲法の国事行為は後付けであって、仮に天皇が祭祀を行われなくなったとなれば、象徴としての役割と元首としての役割を持つ欧米的な国王に近い形になってしまうと思いますが、このような考え方についてどう思われますか。

おっしゃる通りであると思います。その意味では、現憲法下の中だけで「天皇」を考えるの

鎮祭訴訟の最高裁判決で示されたように、慣

習、習俗的なもの、民俗的なもの、伝統的なものを如何に考えるかという問題がそこにあると思います。その意味では、津地鎮祭訴訟を厳格に解釈してゆくならば、難しい面があることも事実ではありますが、如何に穩当に解釈してゆくかによって、簡単にクリアしてゆくことも可能であると思います。この問題突き詰めてゆけば、大嘗祭の問題や大喪儀の問題も出てきます。実際に昭和天皇の大喪儀、今上陛下の即位についても、厳格に整理してゆきますと様々な問題があったわけであります。とは申しまして、昭和天皇の大喪儀、今上陛下の即位礼、大嘗祭についても、憲法上の問題で裁判となりましたが、結果的には合憲となっています。そういう意味では、そのあたりの考え方は、解釈の問題ではすでにクリアされている問題であるかと思っています。ただ、非常に難しいデリケートな問題である

ことも事実です。

Q1-2

敢えてもう一度発言をさせて戴きますが、違憲でないことは当たり前だと思います。天皇陛下のお役割について、「なぜ象徴なのか」ということを宮中祭祀に求めてしまうと、「日本国の象徴が宮中祭祀だ」という話になってしまい、憲法との矛盾が生じてしまいます。憲法制定以前から、天皇は存在されていて、ずっと宮中祭祀を行って来られたのであって、後から天皇を、憲法で「象徴」と位置づけようとしただけであります。よって象徴たる由縁が宮中祭祀となってしまうと、憲法との問題が出てきてしまうと思うので、再度発言をさせて戴きました。

その通りであると思います。

A1-2

天皇については、憲法学者が言うような「天皇唯物論」的な見方ではなく、時空を超えた

Q2

ではなく、もう少し幅広い視点で見てゆく必要があると思います。先程、指摘があったように、宮中祭祀だけに捉えてしまうと、現行憲法の二十条三項を持ち出されるだけです。その意味では、歴史や伝統を踏まえながら、考えてゆかねばならないと思いますし、元首というのが単純に「すべての頂点に立つ者」という制度的な面だけで考えるのではなく、象徴という概念を含めて、アジアなど国際社会の状況にも目を向けつつ、天皇の御存在を考えてゆかねばならないと思います。

Q3

本日の資料にあるように「国民の精神的な基盤、精神的な権威を保ち得る天皇としてあるためには、いかなる条文が必要で、いかなる方途、考え方が必要なのか。今後の次世代の皇位継承、国民の統合、国体の護持のためにも、あらためて象徴としての天皇のあり方とともに憲法に定める条文を少しでも問い直

A3

す作業が立法府からもさらに必要になってくると考える」と先生も指摘をされていますが、まさにその通りであると思います。であるがゆえに、これを伝えるのはとても難しいことでもあります。先生は神道学を専門とされていますし、どのような条文を加えたらよいかというのは申し上げ難いと思いますが、こうした考え方を持つ法学者はいるのでしょうか。この点を、どのように乗り越えることが出来るのかお教え戴ければと思います。

昨年、ある若手の憲法学者らとゆつくり議論する機会がありまして、その時に政教分離解釈の問題等についても話をしました。しかし、若手の憲法学者からは「我々も今後、課題として考えたいと思っている」と言ってくれましたが、法学者、とくに憲法学者は、我々とは真逆の考えを持っている場合が多いです。その若手憲法学者は教えてくれましたが、「憲

A4

象徴という言葉については、その制定過程を見る必要があります。私は、現行憲法の第一章の天皇の条文、現行皇室典範の案文を考えたら、井出成三氏と高尾亮一氏の手記を研究して、論文を書きましたが、今回は、井出氏が述べた「象徴という言葉は、もともと法律用語ではない」ということについて紹介をさせて戴きました。実際に井出氏、高尾氏は「我々はGHQの占領下の中では、この言葉（象徴）で逃げ切るしかなかった」と述べており、両氏は、言葉が「象徴」であっても、中身としては如何に戦前からの伝統を受け継ぐかということに尽力されてきました。その意味では、私も「象徴」という言葉に納得はしていないのですが、井手、高尾両氏ともにこの言葉であれ

Q4

法学者というのは、憲法を純粹に研究すればするほど、憲法学者でいうところの保守化というものになってくる。その保守というのは、我々の考える保守とは全く違う、真逆の考え方、いわゆる左傾化に至ってしまうのだ」と言われたことがあります。その点では、これを改善するようななかなか良い案がないとの回答でした。法学界では、憲法学者が改憲問題を真向から議論すること自体がタブーであって、「なかなか議論すら出来ない環境である」とも言われました。法学界ではそもそも憲法を議論すること自体が、憚られる状況であるということは知っておく必要があると思います。

先生は「象徴」ということは自体が適切と考えられているのか否か、またその理由についてお話しを戴ければと思っています。一度、自民党で憲法改正についての文言で「元首」

という言葉か「象徴」ということで議論をしたことがあります。戦後七十年が経過した今、当然、天皇を「元首」としたいという想いがある一方で、象徴という言葉が良くも悪くも国民に根付いてしまっています。今上陛下は、「象徴」ということを非常に大切に考えられているということは、おことばからも分かります。立憲君主制における国家の元首について、先生は、「憲法の英訳では、天皇を「Emperor」と表記していることから、外国から見れば、天皇は立憲君主制の国家の元首と解されているといえよう」と言及されているわけですが、一度、国会図書館で「Emperor」「Empress」と表記されるのは、現在、世界でどれくらいあるのかと質問したところ、このように表記されるのは、日本の天皇皇后両陛下だけであるという回答がありました。「Emperor」「Empress」というただで立憲君主国の元首という言葉が

A5

は、相容れないものであると思っています。我々は条文云々よりもどのように解釈してゆくのかということが大事で、明治以前も含めて、天皇のあり方を見る方が良いと思います。昨年、今上陛下は讓位（退位）についておことばを述べられました。今上陛下は、天皇のあり方の原点について非常に考えられておられるように思います。おことばを見ると、「本来の天皇はどうだったのか」ということについて、自ら問われておられる部分もあって、法律論・制度論以前に、天皇のお考えを慮ってゆく必要があると思うのですが、如何でしょうか。

宮内庁長官や職員が入れ代わる中でも、実際に、今上陛下は三十年近く陛下として、誰よりも一番長くお務めをなされているわけであります。その意味では、陛下ご自身が最も理解されており、その中で象徴天皇のあり方に

ば、曖昧であるがゆえに、逆にこれまでの伝統を残すためにも使えるし、天皇の様々な行為をそのまま続けることができるというマジックワードであると捉えていました。とはいえ、でも、このような形の条文を認めてしまったことで、今のような混乱を作ってしまったということにもなると思います。一方で、「象徴」という言葉でなければ、もっと大変な状況になっていたこともあり得るわけです。その意味では、「象徴」という言葉をどう考えるかという点について、非常に難しいですが、あえて「象徴」という法律用語ではない言葉を使ったことで、天皇の様々な活動、行為を守るということが出来たということでもあると思います。七十年も経過して、この言葉が根付いているだけに、新たな言葉をどう位置付けるかということとは、非常に努力が必要なことでもあります。先生方も国会議員、政治家でありますので、言葉の力、言葉の恐ろしさを良

Q5

く御理解されていると思います。この点から考えれば、「象徴」という言葉を上手く使ってほしいと思うところです。「元首」という言葉に対して、そもそも拒絶反応を示す方もいるので、「元首であるがごとく」象徴という言葉を使うことも可能であると思います。一方で、「元首」という言葉をはっきりと使ってゆくという考えがあっても当然良いと思います。それから「Emperor」「Empress」という言葉についても、あえて使っているのかなと思う部分もあります。それは何故かと言えば、皇位が百二十五代連綿と万世系が続いている中で、天皇は唯一無二の存在であるという意味で「Emperor」という言葉を使っているという部分もあり、それも踏まえて考えてゆかねばならないと思います。

明治憲法があって、戦後の日本国憲法があるわけですが、そもそも私は憲法と天皇（制）

ついて、自ら追い求められ、そして昭和天皇のお姿、その行為というのも考えつつ、これまで天皇としてのお務めをなされてきました。そしてその天皇の祖宗の原形がどこにあるかといえば、それは、近代化を果たした明治天皇にあるわけで、陛下のお考えの中にも、その原形を見ることが出来ます。明治以前と異なりますと、また違った価値観があるわけで、なかなか難しいところもありますが、指摘されたように、明治以前をどのように考えてゆくのかということも非常に大事な視点であると思います。光格天皇が祭祀を復興されたように、天皇は、常にその時代の中で出来ることをなされて来ました。また、これは明治天皇の有名な話ですが、当時、式年遷宮に費用が掛かりすぎることに、コンクリートで良いのではと主張する宮内大臣と大蔵大臣に対し、明治天皇は「お金が掛かっても続けるべきだ。お金がないなら安い木を使っ

Q6

たらないのではないかとおっしゃられています。これらを「何故続けてゆくのか」ということを、問い続けて来られたのが、陛下御自身であって、その意味では、歴史的な部分も含め、見てゆく必要があると思います。今回のように、陛下が譲位された後の呼称二つを巡っても「太上天皇」とするのか「上皇」とするのか議論があったわけですが、何れのこととも、歴史的な視点に立ってみれば、その答えはおのずと明らかになってくると思います。

マッカーサーの三原則では、「天皇は元首である」とされていたと思いますが、「元首」という言葉は、非常に政治的な意味合いも強い言葉であり、今上陛下はあくまでも「象徴」として徹しられておられるわけで、その意味では、戦後、「象徴」という言葉で乗り越えて来られたのは、非常に大変であったと思います。昨年のおことばの中で、天皇は、国民のことを常

ることがよく分かります。つまり、天皇陛下御自身が、宮中祭祀ということを強く意識されていることは事実であると思いますし、われわれが少しでも良い形でそれを位置付けられるようにしてゆければと思います。宮中祭祀や宮中三殿に関していえば、金銭的にも様々な制約から、陛下は色々和我慢をなされているという状況ですが、そのような中にある「祈り」ということを常に大事にされてきました。具体的にどのような条文にしているかということについては、私自身もまだ考えているところがあります。

A6

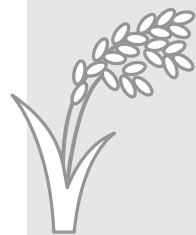
に祈り、時には国民に寄り添う象徴としての行為もなされてきたと述べられています。私は、今回の議論の中で、天皇が行う宮中祭祀について、少しでも良い形で位置づけることができる、国民にとっても理解されやすくなるのではという感じがします。当然、宮中祭祀をどのように盛り込むのかということについては、これまでの議論を踏まえると極めて難しいということは重々承知の上ですが、何か工夫が出来ないものでしょうか。これまでも「祈り」についてここまで述べられたことはなかったことであり、昨年のおことばで、「宮中祭祀をきちんと位置付けてもらいたい」という陛下の思いも含まれていると思うのですが、如何でしょうか。

今回のおことばで、陛下は天皇の「祈り」について、非常に慎重に言葉を選んで述べられており、同時に「祈り」を非常に大事にされている

藤本 頼生先生 御略歴

昭和四十九年、岡山県出身。皇學館大学文学部神道学科卒業、國學院大学大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了。博士（神道学）。専攻は、宗教行政論、神道教化論、宗教社会学。皇學館大学卒業後、神社本庁に奉職し平成二十三年に退職、國學院大学神道文化学部神道文化学科専任講師を経て、現在、同大学神道文化学部准教授を務める。主な著書として、『神道と社会事業の近代史』（弘文堂）、『神社と神様がよくわかる本』（秀和システム）、『地域社会をつくる宗教』（明石書店）がある。

大嘗祭の歴史と意義



今上陛下の御譲位に關しまして、国会において審議がなされる段階となっています。称号については、「太上天皇」の略称である「上皇」ではなく、歴史上にない、新たな称号としての「上皇」とされ、また、皇后陛下については「上皇后」、更に、秋篠宮親王殿下についても「皇嗣殿下」とされる方向です。加えて、宮内庁にも新たに「上皇職」という組織が設置されることなど、近代以降初めてとなる譲位にあたり、新たな皇室制度のあり方が提案されています。もちろん、これまでの我が国の歴史においても、天皇や皇室の制度については、時代ごとの状況にあわせて変化をして来ており、今回、新たな制度を設けること自体も、決して間違ったことではないと思います。ただ一方では、天皇や皇室が有する歴史や伝統・文化を無視して、すべて新しい制度に変えてしまうことは、これまでの歴史・伝統に基づく天皇の権威を喪失させかねませんし、天皇とともに歩んできている我が国の伝統や歴史を否定することにも繋がりがねません。やはり歴史・伝統に関して、守るべきところは守っていかなければなりませんし、その守っていくべき最たるものの一つが、

まさに天皇の祭りなのです。

もともと、天皇の祭りにおいても、歴史の歩みとともに祭りの形式が変化してきている面はあります。ただ、天皇により、天照大御神をはじめ歴代の天皇や日本の神々に向けて、国家の安寧と国民の幸福のための祭りがなされてきていること自体は全く変わっておらず、この点はしっかりと守っていかなければなりません。そして、天皇の祭りの中でも最も重要な祭りが大嘗祭であり、天皇の在世中にたった一度だけしか行われない儀式です。勿論、今回、御譲位に際し行われる儀式については、近代法に一切明記がなく、この問題をどうクリアしていくかをまず議論する必要がありますが、近い将来には即位の礼とともに大嘗祭の斎行も予想されます。そこで今回は、歴史・伝統の守るべきところは守るという観点から、大嘗祭の歴史と意義について説明をさせて戴き、来る大嘗祭に向けて考えていく上での参考にして戴ければと思います。



◆大嘗祭について―大嘗祭と新嘗祭の主な相違点

大嘗祭については様々な定義が考えられますが、祭りの形式や内容に着目する場合の一般的な説明としては、「即位されて初めて行われる新嘗祭のこと」と言い、その年の新穀を天皇陛下が天照大神を

はじめ神々に直接お供えし、また、御自身も召上がられる神道の祭り」(『ガイドブック 即位の礼・大嘗祭』)ということができます。新嘗祭は、宮内庁のホームページにおいて、毎年十一月二十三日(勤労感謝の日)に、「天皇陛下が、神嘉殿において新穀を皇祖はじめ神々にお供えになって、神恩を感謝

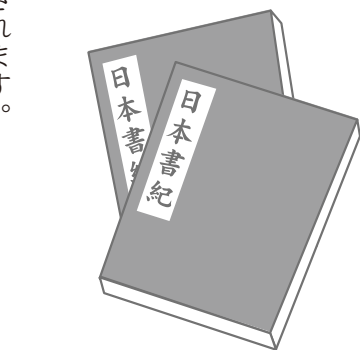
された後、陛下自らもお召し上がりになる祭典。宮中恒例祭典の中の最も重要なもの」と説明されています。このように、祭りの趣旨自体は大嘗祭も新嘗祭と同じですが、形式上の相違点としては主に三点挙げられます。まず一つが、新嘗祭が「毎年」斎行されるのに対して、大嘗祭は「毎世」（二世一度）斎行される皇位継承儀式としての性格を有していることで、ことに近代以降は、踐祚・改元・即位の礼・大嘗祭・大饗を中心とする一連の儀式を総括して「大礼」と称します。二点目は、新嘗祭が宮中・神嘉殿において斎行されるのに対し、大嘗祭は「大嘗宮」という大嘗祭のためだけの神殿が新設されて斎行されます。三点目は、新嘗祭に供えられる新穀は、昭和天皇の御代からですが、皇居内で天皇自らお手植え、お刈取りされた初穂と全国都道府県よりの献納品（献納品は明治以降）である一方、大嘗祭は「悠紀」（大嘗祭執行地より東の地方）および「主基」（大嘗祭執行地より西の地方）の両地方の斎田において収穫された新穀が、

「八咫鏡」を祀る「御鏡の祭り」を受け継ぎなさいとあります。現在は、伊勢の内宮と宮中の賢所に祀られており、まさにこの神勅が天皇の祭りそのものの起源となります。同じく「三大神勅」の「斎庭の稲穂の神勅」では、天照大御神が高天原で育てた稲穂をわが子孫に授けるとあり、我が国の稲作文化の起源とともに、稲作文化の重要性が表されています。加えて『古事記』には、高天原に天照大御神の斎田があり、新穀をお召しになる祭殿のことが記されており、それゆえ斎庭の稲穂を授けることには、高天原と同じように神聖な斎田で稲穂を育て、神々にお供える意味も含んだ、まさに天皇による収穫の儀式である大嘗祭や新嘗祭の起源として位置づけられています。

②大嘗祭の創始について

次に「大嘗祭の創始」について説明します。大嘗祭の前提である新嘗祭のその原初の形態とされる毎年の収穫祭である「ニヒナヘ」は、奈良県の纏向

「大嘗宮」を構成する悠紀殿・主基殿にそれぞれ供えられることにあります。また明治時代以降、両殿各々の南庭には、各都道府県特産の農水産物等を供進する



「庭積机代物」も献備されます。
にわづみのつくえしろもの

◆大嘗祭の歴史

①天皇の祭祀の起源について

まず「天皇の祭りの起源」について説明します。この点については、我が国最初の正式な国の歴史書である『日本書紀』に書かれており、皇祖・天照大御神による「三大神勅」に基づいています。「三大神勅」のうち「宝鏡奉斎の神勅」には、天照大御神から授かり、歴代の天皇が代々受け継ぐ三種の神器である

遺跡の発掘調査などにより、稲作が開始された弥生時代に源流があると見られ、その後は『万葉集』や『常陸国風土記』の記述から、それぞれの地域に適した、それぞれの地域で異なる形態の「ニヒナヘ」が行われていたと考えられています。天皇による新嘗祭は、歴史学的には、こうした民間の収穫祭が皇室・国家の祭りとして整備されたものと言われており、そもそもは天皇の「御田」で収穫された新穀が供えられていました。天皇の御田の新穀ではなく、地方の新穀（後の悠紀・主基につながる）が新嘗祭に供えられた最初の例は、飛鳥時代の天武天皇（第四十代）の時が初見となりますが、当時は、皇位継承儀式としての「大嘗」（大嘗祭）と毎年恒例の「大嘗」（新嘗祭）の区別はされておらず、厳密な意味で大嘗祭が確立したのは、次の持統天皇（第四十一代）の時となります。こうした点について、奈良時代に成立した律令中、『神祇令』に「大嘗」の「世毎」と「年毎」の違いが国の制度の上でも示され、続く平安時代にまとめられた『延喜式』において、「世毎」

の大嘗祭が、すべての祭祀の中で唯一、「大祀」であることが明確化されました。

③大嘗祭の中断と復興について

平安時代前期までに国の制度としても確立した大嘗祭ですが、同中期には、それまで諸国から定められていた悠紀・主基が、悠紀が近江国、主基が丹波・備中・播磨（のちに丹波・備中）のいずれかの、畿外でも京都に比較的近辺の地方に固定されました。また鎌倉時代には、朝廷と幕府が争った「承久の変」の影響により、大嘗祭が斎行されずに退位がなされたり、室町時代前期の南北朝期にも、大嘗祭が斎行されなかった事例が見られます。更に同中期の、将軍の後継者をめぐる争いに端を発して生じた「応仁の乱」と、その後の戦国時代における国内の混乱により、天皇九代・二百二十一年にわたって大嘗祭が中断しました。こうした状況において、第百五代の後奈良天皇は、天文十四年、伊勢の神宮に宣命を奉り、大嘗祭を行い得ないことを深謝し、世の

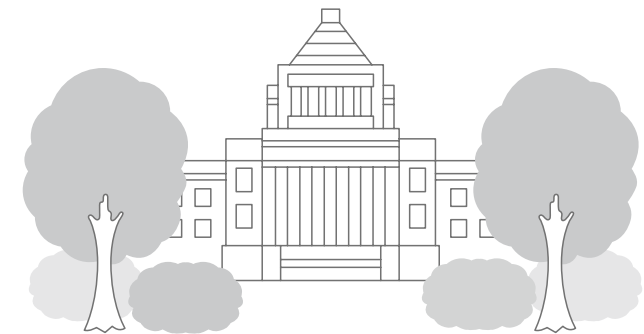
中の平和と民の豊穰、大嘗祭の斎行を祈願されました。このように、歴代の天皇にとって、大嘗祭が行えないことをいかに申し訳なく思っていたかが分かります。大嘗祭の歴史を時代毎の歴史と合わせて見れば、大嘗祭は国内が安定しているからこそ行えるのであって、国内が不安定で争いが生じている時は、大嘗祭は行い得ないことが分かります。江戸時代になってからは、実質的な権力が幕府にあつて、大嘗祭は暫く復興出来なかったのですが、靈元天皇（第百十二代）は、後奈良天皇と同様、大嘗祭の復興を祈願され、並々ならぬ御決意をもって幕府と交渉した結果、次の東山天皇（第百十三代）の時に大嘗祭が復興しました。ただし、この時は幕府の予算の問題から極めて簡略化した形で実施され、次代となる中御門天皇（第百十四代）の時には、再び大嘗祭は斎行されませんでした。しかし、桜町天皇（第百十五代）の際、尊皇の念の篤い第八代将軍の徳川吉宗のもと、大嘗祭について幕府側から奉賛の申し出があり、これにより往古のままではないなが

らも大嘗祭が復興され、以後、今日まで途切れることなく続けられています。

④近代の大嘗祭について

明治天皇の大嘗祭は、東京（皇居吹上御苑）での最初の大嘗祭で、その斎行にあたっては古代の原則にもどり、悠紀・主基があらためて全国的規模で選定されました。また、新穀のみならず、地方の特産を献備する「庭積机代物」が、悠紀に卜定された甲府県（山梨県）住民の願いにより新設され、大正天皇の大嘗祭からは、悠紀・主基両国の特産に限らず、全国的規模に拡大されました。更に、大嘗祭の後、大嘗宮の一般参観が実施されるようになり、平成の大嘗祭では十八日間に全国各地より四十四万人が参観しました。

明治二十二年に制定された皇室典範では、第十一条「即位ノ礼及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」と、以後の大嘗祭は京都で行われることが規定されました。これは、明治天皇の即位の礼は京都でな



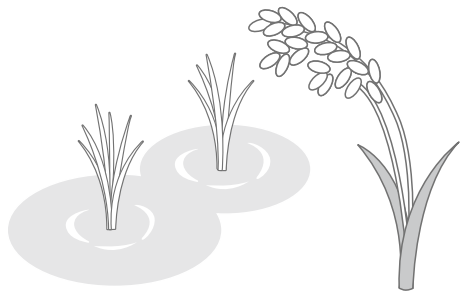
され、大嘗祭は東京で斎行されましたが、この時、都を京都にするか東京にするかで非常に混乱を来たし、その後、明治政府の重鎮であった岩倉具視が「次代より即位の礼・大嘗祭は京都で行うようにしたい」と進言して、明治天皇より御承認を賜ったという、明治維新以後の歴史を踏まえて規定されたものです。また明治四十二年には、「登極令」が制定され、大嘗祭についての詳細が定められました。第四条には「即位ノ礼及大嘗祭ハ秋冬ノ間ニ於テ之ヲ行フ」、同二項には「大嘗祭ハ即位ノ礼ヲ訖リタル後続テ之ヲ行フ」と規定されており、これに基づき、大正・昭和

の大嘗祭は京都（仙洞御所跡地）で斎行され、かつ即位の礼と大嘗祭が、秋冬の間（十一月）にほぼ連続してなされることになりました。更に「登極令」第五条「即位ノ礼及大嘗祭ヲ行フトキハ其ノ事務ヲ掌理セシムル為宮中ニ大礼使ヲ置ク」の規定により、即位の礼と大嘗祭の事務を管掌する「大礼使」が宮中に置かれました。

⑤平成の大嘗祭について

今上陛下の大嘗祭は、現行の日本国憲法や皇室典範のもとにおいて最初に行われた大嘗祭という大きな意義を有しています。すなわち、現行の皇室典範第二十四条では、「皇位の継承があつたときは、即位の礼を行う」と、即位の礼に関する規定はありませんが、大嘗祭の規定はなく、かつ明治皇室典範の廃止に合わせて、当時の「登極令」を含めた皇室令がすべて廃止されたことから、法律上、大嘗祭を明記したものは無くなってしまいました。そこで当時、神社本庁は「即位に関する儀礼は、踐祚・改

元から即位礼・大嘗祭・大饗並びに親謁にいたる諸儀式行事によって完遂されるものであり、個々別の儀式ではないことはその本義や歴史に徴しても明らかである。現皇室典範（二十四条）の定める「即位の礼」も、伝統的な諸儀式行事のすべてを総称するものと理解する。」との基本姿勢を示しています。そして現実に、平成二年に平成の即位の礼及び大嘗祭等の一連の皇位継承儀式が滞りなく斎行されたのです。



委員会」、「即位の礼準備委員会」、「即位の礼委員会」が順に設置され、宮内庁では「大礼検討委員会」、「大礼準備委員会」、「大礼委員会」、「大礼実施本部会議」が順に設置されました。このように、内閣、宮内庁の双方で調査研究から実際の式典の準備を行い、遂行していく委員会がそれぞれ設けられていきました。二点目は、大嘗祭執行地が京都から東京（皇居東御苑）に変更されたため、これに付随する行事（例えば、「京都二行幸ノ儀」や「東京二還幸ノ儀」など）が不要となりました。三点目は、当時の過激派による攻撃を警戒し、悠紀（秋田県）・主基（大分県）両地方の斎田に関する発表が「斎田拔穂の儀」の三日前までなされず、これによって斎田のお祓い等が予め実施できませんでした。そのため神社界では、両地方に独自に「奉祝田」を設定し、清祓・お田植祭などの神事を実施しました。当時は、御大礼に反対する過激派によるゲリラ事件が頻発し、常陸宮邸や京都御所に迫撃弾が打ち込まれたことや、都内の神社が放

火により本殿全焼という事件が発生し、結果的に神社関係では二十社余で被害が確認されました。このような状況下ゆえ、斎田も荒らされる危険性が高く、直前まで発表されませんでした。四点目は、大嘗祭当日の（旧）官国幣社への奉幣はなされませんでした。ただし、勅祭社への幣帛料の御下賜はなされています。大嘗祭に合わせて、天皇が神社に奉幣をすることは、古代より実施されており、登極令では官国幣社に定められて、昭和の大嘗祭では官国幣社への奉幣が実施されましたが、平成の大嘗祭では勅祭社のみとなりました。

⑥「大嘗祭の歴史」に関するまとめ

大嘗祭は歴史上二貫して、唯一の「大祀」として皇位継承の儀式の最重要かつ特別な祭りであることとされてきました。これは近代においても、他の皇室祭祀は皇室祭祀令に定められたのに対して、大嘗祭だけは登極令で定められているところからも明らかです。また、大嘗祭が斎行されるのは、国

内の政治・社会秩序が安定し、平和な時であることが、これまで歴史的に中断されてきた例から見出せます。更に大嘗祭はその創始より、天皇と民（国民）がともに奉仕する儀式であることが原則とされています。

◆大嘗祭の意義

①大嘗祭の本義に関する政府見解について

大嘗祭の意義について、ここではとくに平成の大嘗祭に関することを中心に説明していきたいと思います。まず平成の大嘗祭時の、大嘗祭の本義に関する政府見解は、「大嘗祭は、稲作農業を中心とした我が国の社会に古くから伝承されてきた収穫儀礼に根ざしたものであり、天皇が即位の後、初めて、大嘗宮において、新穀を皇祖及び天神地紙にお供えになって、みずからもお召し上がりになり、皇祖及び天神地紙に対し、安寧と五穀豊穡などを感謝されるとともに、国家・国民のために安寧と五穀豊穡

などを祈念される儀式である。それは、皇位の継承があつたときは、必ず挙行すべきものとされ、皇室の長い伝統を受け継いだ、皇位継承に伴う一世に二度の重要な儀式である。」として、これまで説明しました大嘗祭についての定義・意義や歴史と軌を一にするものとなっています。

②大嘗祭の性格や位置づけ及び

その費用についての政府見解・答弁について

平成の大嘗祭時において、大嘗祭の性格や位置づけ及びその費用についての政府の見解や答弁は、以下の三点に纏められます。まず一点目は、大嘗祭は一世一度の重要かつ伝統的な皇位継承儀式であり、憲法に定める皇位の世襲制度にそくして公的性格を有していることから、国家が人的・物的な側面からその挙行に手立てを講ずることは当然であり、費用も宮廷費から支出することが相当であるということです。ここで重要なのは、大嘗祭は「憲法に定める皇位の世襲制度」にそくし

た「公的性格」を有する儀式であると明確に位置づけていることで、「公的性格」を有するゆえ、費用も内廷費ではなく宮廷費から支出することが相当としています。ただし一方で政府は、大嘗祭は宗教上の儀式としての性格を有することは否定できず、またその態様からも、国家がその内容に立ち入ることはなじまないため、内閣の助言と承認を要する国事行為として行うことは困難であるとも述べています。そのため宮廷費の支弁による費用の支出は、大嘗祭の有する「公的性格」に着目して行われるものであるとし、その目的は宗教的意義を持たず、その効果も特定宗教への援助・助長をもたらすものとは言えず、津地鎮祭訴訟の判決で確立した目的効果基準に照らして妥当なものであるとしています。このことは実際に、大嘗祭の後、いはゆる大嘗祭訴訟が五件ありましたが、そのすべてで目的効果基準に照らして違憲ではないとする判決が示されています。二点目は大嘗祭の天皇の行為における「国事行為」・

「公的行為」・「その他の行為」のうちに「その他の行為」に属しますが、公的性格・公的色彩を有するものに区分されることとしていくことです。これは、先般の天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議（第一回）の配布資料でも、天皇の「その他の行為」の中で公的性格・公的色彩を有する行為の、その唯一の例として大嘗祭が挙げられています。三点目は登極令を含む皇室令は、旧憲法下の法律とは異なる独自の「宮務法」の体系に属していたが、現行憲法の施行にともない「宮務法」体系そのものが消滅したことにより一律に廃止されたもので、その内容が現行憲法に反していたために廃止されたものではないため、今日、法的な根拠はなくても、その規定の参酌は可能であるということです。終戦後、明治皇室典範や登極令が廃止され、大嘗祭については明確な法的根拠がなくなってしまうました。平成の大嘗祭では登極令を参酌して行われたわけですが、当時は、現行憲法の施行の際に廃止されたものであることから、

一部から憲法に違反するのではないかとの声もありました。これに対して政府は、登極令は憲法に違反するから廃止されたのではなく、明治皇室典範時の典憲の二大体制から、憲法を上位法とする体制になったことにより廃止されたものであると述べています。ゆえに、登極令を参酌して行うこと自体は現行憲法のもとでも何ら問題はないこととなります。

③大嘗祭に対する批判とその反論

大嘗祭訴訟は計五件存在しましたが、その際とくに大嘗祭に対してなされた批判の内容について、二点説明します。一点目は「大嘗祭は天皇の「神格化」につながり、国民主権に反する」という批判です。当時はマスコミが煽ったこともあり、「大嘗祭は天皇が神と一体となる儀礼である」という宣伝をしました。大嘗祭が天皇の「神格化」につながるとの説は、そもそものは大正から昭和前期の民俗学者である折口信夫による「まじこふすま真床覆衾」論（大嘗祭の意義

は、天孫降臨の神話に因み、天皇が大嘗宮の「寢座（神座）」の覆衾にくるまることで、「天皇霊」を身につけるとする論）があり、それをもとに、大嘗祭が天皇の神格化や神霊との聖婚儀礼であるとする説が一部の学者によって唱えられました。ただしこれについては、神道学者の岡田莊司氏（國學院大學教授）により大嘗祭の儀式内容を伝える儀式書や古記録類を調べてもそのような行為はまったく見当たらないことが論証され、宮内庁も「神座は皇祖・天照大神を迎えるもので、天皇自身は触れることもせず、神座で天皇と神が一体化するというのは誤り」と当時言及しています。二点目は「大嘗祭は憲法の定める政教分離に違反する」という批判です。この点については、日本の歴史を通じて、大嘗祭が即位の礼と同様、不可欠な皇位継承儀式であることは、『日本書紀』をはじめとする古典や神祇令・延喜式、明治皇室典範や登極令の規定からも明らかです。更に、現行の日本国憲法第二条では、日本の伝統・歴史を踏まえて「皇位の世襲」を定めており、こ

のような「皇位の世襲」とともに代々受け継がれてきた伝統的儀式である大嘗祭は、憲法において容認されるものであると言えます。また、仮に大嘗祭のように「宗教色」を帯びているとしても、国がそれに関わる目的はあくまでも皇位継承に伴う伝統的儀式を挙行することであり、特定宗教を布教・宣伝するような「目的」は一切なく、それゆえ特定宗教への援助といった「効果」も生じないという、「目的効果基準」に照らしあわせて違憲ではありません。同様に大嘗祭訴訟では、大嘗祭をはじめ関連行事に都道府県知事などが参列することも違憲でないかということも提訴されましたが、違憲でないことは、一連の大嘗祭訴訟における最高裁判決で示されています。そもそも、大嘗祭を含めた天皇の祭りそのものが、宗教法人法における「宗教団体」の定義に当てはまるものではなく、宗教の教義をひろめ、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とするものではありません。かつその趣旨は天皇が国家の安寧と国民の幸福を祈られるこ

とにあつて、特定の個人の魂の救済や一家一門の繁栄を祈願するといった一般宗教とは根本的に異なるものです。この意味で、大嘗祭を含めた天皇の祭りを、憲法の定める政教分離原則の観点から捉えること自体、根本的に見直される必要があると思います。政教分離については様々な解釈がありますが、最高裁判決の目的効果基準で示されていますように、日本のような自由主義の国においては、国と宗教は何らかの形で関わっていくことが現実であります。天皇の祭り自体は宗教団体の祭りではなく、常に日本国及び日本国民統合の象徴である天皇が、国家国民のために祈る祭りです。日本に馴染む政教関係のあり方を考え、実現していくことが大切であると思います。

④「大嘗祭の意義」に関するまとめ

まず大嘗祭は、その創始から一貫して、歴史的に天皇と国民がともに奉仕する儀式であることです。この意味で、今日の現行憲法で謳う国民主権にも

通ずる祭りであると言えます。もう一つは、大嘗祭は日本国憲法の定める「皇位の世襲」に基づいた、皇位継承に関わる公的な儀式であることです。現行憲法では、平等を謳っていますが、皇位については、あえてこれまでの日本の歴史に従って行う「世襲制度」であることを定めています。まさに日本の伝統を踏まえた規定であると言えます。このように日本の歴史や伝統に基づき、皇位を憲法に定めていることは、同時に皇位継承に伴う儀式も憲法上認められることを表しており、更に憲法に基づく皇位の世襲に伴う儀式という点で、大嘗祭が公的な性格を有することは明白であると言えます。

現在においては、大嘗祭は日本の伝統・文化や歴史に基づく儀式であることを再認識することが重要であると思います。大嘗祭という一つの儀式がある、飛鳥時代以来の千五百年近くに及ぶ日本の伝統と文化、その間における歴代の天皇の想いをはじめ、国民が関わり奉仕してきたという、大嘗祭の歴史的な重みを感じつつ、今後検討していく必要があります。

まず。その一つとして、大嘗祭の位置づけ、天皇の行為区分のうち、どの行為に位置づけるかという点が挙げられます。平成の大嘗祭においても、大嘗祭の位置づけについては神社界で議論になりました。国事行為であるべきだとする声があった一方で、「祭り」であるので、内閣が介入する国事行為とするのは良くないのではないかとの意見もありました。結果的に政府は、国事行為ではなく「皇室の公的行事」と位置づけました。これは政府自体が、「祭り」という性格を有する以上、世俗権力が関わることをなるべく避け、かつ祭りが厳粛に神聖なものとして斎行されるためにも、なるべく関わらないようにしたと言われていますが、当時の神社界でも、大嘗祭の後、考え方によっては政府がとった「皇室の公的行事」で良かったのではないかと意見も出しました。ただし、次回の大嘗祭の位置づけについては、今後神社界でもあらためて議論し

あるのではと考えています。

質疑応答



Q1

平成の大嘗祭の時、私は新聞社政治部の記者として、実際に取材をさせて戴きました。現行憲法上で行われる初めての大嘗祭であつて、政府も色々大変な状況であつたと思います。次回の大嘗祭について前回を踏襲して行うものと考えて良いものでしょうか。平成の大嘗祭を踏まえて、次回から変わっていかねばならないと思う点があれば教えて戴きたいと思います。

A1

大枠のところでは、平成の大嘗祭を前例として踏襲する点が多くなるかと思いますが、今後詰めていかなばならないこともあると思

ていく必要があると思います。

Q1-2

平成の大嘗祭が終わった後に、批判的な意見はなかったのでしょうか。

A1-2

祭り自体についての批判はありませんでしたが、当時、大嘗祭は非公開で行われ、撮影等は行われませんでした。当然、天皇陛下の御告文は一切非公開だったのですが、どのように入手したのか、一部報道で天皇の御告文が流れてしまいました。これは宮内庁の管理体制の問題で、このような点については、神社界からも批判の声がありました。

Q2

天皇陛下の行為の三分類で言えば、大嘗祭は、統治行為に関わる憲法の国事行為でなければ、公的な行事でもない、重要ではあるけれども法的コントロールが及ぶことのない行為とされています。しかし、大嘗祭に関

Q3

あつてこそ中心となる祭りがあります。それゆえ、簡素化する部分について思い当たる所はありません。一つ一つが大嘗祭を構成する上で大事な儀式であることを御理解戴ければと思います。

大嘗祭は簡素化する必要はないと思います。あるべき神事はきちんと行わなければならないと思います。平成の大嘗祭の時、私は官邸におりましたが、当時は社会党党首が土井たか子議員でしたので、国事行為である即位の礼は極めて制約されたものとなりました。政府も非常に苦労していた所を目の当たりにしました。皇室の守るべきところは守り、伝えるべきことは伝えていくとされた方がよいと思います。当時は三笠宮様からも御意向について色々伺っていたところではありましたが、現実的な形で大嘗祭が斎行できたと思っています。

A2

らば、どの部分を簡素化すべきなのでしょう。祭祀として絶対に譲れない部分はあると思います。その点について先生の御意見を戴ければと思います。

連する費用については、当然宮内庁所管の費用、つまりは国民の税金が使用されています。祭祀は皇室のアイデンティティであり、極めて大事なものであることは理解しているのですが、このようなことを考えると、全く我々の目に触れない形で「どのような事でもやっていい」というわけにはいかないのではないかと思います。先生は先程「その他の行為」とされたことは良かった」と述べられていました。法的コントロールが及ばなかったということについて理解できる一面はありますが、これから大嘗祭において、何人が関与し、どういう儀式で、どういうものが扱われているのかということについて、どんなふうに勘定で行うことについては、いくら重要な行事であっても、なかなか難しいことであると思います。この点をどのように考えるか御意見を戴きたいと思います。もう一点は、仮に大嘗祭の権威を失わない形で簡素化するな

A3

当時はゲリラが多発し、また大嘗祭を含む御大札に対して、マスコミの報道も非協力的な面が強かったと思います。様々な点で制約をされた中で行われたわけですが、そうした制約がなされた部分を一つ一つ精査し、次の御大札に向けていかにするかを検討して、その結果を今後提案していきたいと考えています。

Q4

私は、実家が酒屋で、大嘗祭に白酒・黒酒を献上させて戴いたのですが、実は当時、左翼のゲリラに真夜中、時限発火装置で発火されました。当時祖母は、泣きながら作っていたのを覚えています。そう思うと大嘗祭というのは、まだ右派・左派の対立があるのかと怖いイメージを持ったことを思い出します。今後、平成三十一年から三十二年にかけて、世界が日本を注目する中で、どのようにゲリラやテロを防ぐのか、日本の信用や国柄を守るのかということは根幹的な問題であると思っています。

「法的なコントロールが及ばない」という点については、大嘗祭に内閣や宮内庁が全く関わらないということではありません。また、天皇の御告文など詳細については非公開ですが、大嘗祭の内容や式次第、終了後の大嘗宮などは公開されていますので、すべてが非公開なわけではありません。その点は御理解戴きたいと思います。簡素化する点については、どの部分を削るかを述べるのも畏れ多いことであると思います。大嘗祭において基本となるのは、「大嘗宮ノ儀」ですが、悠紀・主基の斎田を定めること、実った稲を刈り取ることなど、すべて大嘗祭を構成する大事な祭りです。周辺の祭りが

Q5

大嘗祭の意義について、折口信夫先生が示した「真床覆衾」論について、國學院大學の岡田莊司先生は「そのような行為は全く見当たらず、パリンピックの前年に大嘗祭が斎行されることになりましたが、国内の治安やテロ対策を不足ない形で整えていくことが必要であり、警備は抜け目なくしっかりとしていかなければならないと思います。国民が共に奉仕するという点についてですが、悠紀殿・主基殿に鋪設される「庭積机代物」には四十七都道府県のすべてからお供えがなされ、また各地方では大嘗祭奉祝の式典が催され、各地の神社でも特別な祭りが行われます。様々な形で大嘗祭は国民全体で奉仕されます。即位の礼からはじまって一連の行事が国家的行事となります。神社界をはじめ、国民全体で奉祝するような形で、次回の御大礼が行えるよう目指していききたいと思っています。

「ない」と否定したとのことですが、私はどちらにも正確ではないと思っています。これは私の仮説ですが、「天皇霊を身につける」ということは正確ではなく、大嘗祭の儀式を通じて、「高天原にいらっしゃる皇祖霊と血統のみならず霊統でつながる」ということが正確であると思います。岡田先生の言うように、大嘗祭の儀式内容を伝える儀式書や古記録類に載せられていないとしても、目に見えない世界のことであって、絶対にはずしもないはずの世に言い切れないのではと思います。事実は分かりませんが、これぐらいの想像を持って守っていけばいいのではないかと思います。天皇の神格化が国民主権に反するからといって、ここまで言い切ることは出来ないのではないかと私は思います。天皇の祭りは我々庶民に教えてもいいものと、そうではないものがあるということを大前提に考えた方が良いでしょうと思います。私は、大嘗祭の簡素化など

います。この三十年で、これほどに左派が多いのかと痛感させられたわけですが、現在は共産党でさえ、天皇・皇室観を変えてきています。当時は昭和天皇の崩御ということもあり、ゲリラの行為は過激でしたが、次回の大嘗祭の時には、平成の大嘗祭ほど過激になることはないのかと思います。この三十年の国民の変化をどのように捉えるのかについて先生のお考えをお聞かせ戴きたいと思っています。もう一点は、大嘗祭は陛下と国民が共に奉仕するという説明がありましたが、大嘗祭に国民がどのように参画しているのか、皇室の御事だけあって中々情報が出されない中で、そういう儀式があるのかどうかということは、非常に新鮮な学びでした。現在は大嘗祭どころか新嘗祭についても知らない国民が多いと思います。新嘗祭は単なる収穫感謝祭というのが大多数の認識であると思います。大嘗祭を通じて、三種の神器の継承、皇統の正統性、

A4

日本は稲作を行う瑞穂の国であるということ、それこそが日本人の国民性であるということが最も感じられます。しかし先程も述べたように、国民にとっては御簾の中の話であって、国民がどのように参加できるのか、奉祝できるのか、もしあるならばどのように盛り上げてゆけばいいのかについて、お考えをお聞かせ戴ければと思います。

国民の意識の変化についてですが、今回の御譲位の件でも、世論調査で国民の九割が支持していますように、国民の陛下に対する敬愛の念は大変深いものとなっています。そうしてみれば、私も今回はゲリラなどの騒動は少ないのではないかと期待しています。ただ、もちろん警備については、例えば古代より斎田が点定された段階から、不測の事態に備えて斎田を常に監視するなど、厳重になされました。もし報道の通りに進めば、東京オリンピッ

については反対ですし、大嘗祭には根本的に知ってはいけない秘儀がありますので、知ってはいけないし、それを公表することは決してあってはならないと思います。大嘗祭が天皇と国民が共に奉仕する儀式であるということとは良いのですが、共に奉仕と言うよりも、天皇が神々への奉仕をなさることに国民として感謝をするということが正しい表現ではないかと思いますが、この点についてお考えをお聞かせください。

A5

基本的に御指摘の通りだと思います。祭りには本質的な意味があり、その意味をどのように捉えるかについては、其々の捉え方で私は良いと思っています。秘儀ということに関しても、秘儀があるかどうかではなく、そもそも知ってはいけないことであると思います。岡田先生は記録上「神と天皇が一体となるとする記述は無い」と述べているだけであって、

Q6

「大嘗祭で神と天皇が一体になることは絶対にない」と言っているではありません。あくまでも学術的な話の上でのことで、そういった点を前提として、大嘗祭の本質的な意味を其々がどのように捉えるかが重要であると思います。

大嘗祭に対する批判というのは、大嘗祭で天皇が神格化されることにより国民主権に反するということであると思いますが、もとも祭祀自体も神勅に基づくものであります。天皇の神格化と政治的な問題は全く別のことであると思います。御指摘のように、大嘗祭が宗教性を帯びる儀式であったとしても、特定の宗教を押しついたりするものではないことが、目的効果基準に基いて判断されています。大嘗祭を行う前の天皇は、完全な天皇ではないという意味で、「半天皇」と呼ばれたこともありましたが、大嘗祭は、天

A6

当時は、大嘗祭は天皇を神格化するから駄目だという批判が非常に強く、それに対して、大嘗祭はそういう儀式ではないと反論せざるを得ない状況にありました。大嘗祭の有する精神的・信仰的な面について、神社界としてしっかりと訴えていくことは非常に重要であると思います。警備の問題については、御指摘の通り、決して楽観視してはいけないと思います。

齊藤 智朗先生 御略歴

昭和四十七年、東京都出身。國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了。博士（宗教学）。専攻は、宗教学、近代神道史、近代日本宗教史。國學院大學日本文化研究所勤務の後、現在、同大學神道文化学部教授を務める。主な著書として、『井上毅と宗教―明治国家形成と世俗主義―』（弘文堂）がある。

照大御神はじめ神々に奉仕することで、「半天皇」から「天皇」になる儀式であると思っています。形態のことは分かりませんが、大嘗祭が極めて重要な祭祀と位置づけられてきたのは、ここにその根拠があると思います。大嘗祭では、憲法上の問題だけクリアしていれば良いわけで、天皇の神格化云々ということ述べることは、逆に誤解を招くのではないかと思うのですが如何でしょうか。もう一点は、平成の大嘗祭において、主基は十分に設けられましたが、当時は、ゲリラの関係で発表が直前だったので、知恵をしばって対応を致しました。当時と状況が変わり、最近では、神社が爆破されることも無くなったので、平成の大嘗祭の時のような事態にはならないと思うのですが、ゲリラの動きを見ながら、もしもの時も想定した上で、諸準備を進めてゆかねばならないと思いますが如何でしょうか。

現在の皇室祭祀



八月八日に発表された陛下のビデオメッセージに先がけて、宮内庁では陛下の御負担軽減に伴う発表が平成二十年にありました。その時は、宮内庁の掌典長が長官に呼ばれ、御負担の軽減ということならば宮中祭祀についても検討に入らなければならないだろうが、どう思うと言われたそうです。それについて相談を受けた私どもは、宮中祭祀の軽減の前に、まずは御公務関係を含めた軽減が先ではないでしょうか。その後ならば、宮中祭祀についても軽減を検討する余地はあるのではないのでしょうかと答えたと記憶しています。宮中祭祀の軽減については、平成二十年十二月三十一日に私どもは掌典長まで以下のように伝えさせて戴きました。新嘗祭については夕の儀のみの御奉仕とし、暁の儀は掌典長代行とする。正月元旦の四方拝は御所にてお務め戴く。そして歳旦祭については御代拝とする。それから毎月一日に行われる「旬祭」について、暑い時期の七、八月、寒い時期の十二、一、二、三月は御代拝とする。そのようなことを申し上げたように思います。しばらく経っても何も反応がなかったので、私から掌典長にそ

の後どうなりましたかと尋ねたところ、ハッキリした返事はありませんでしたが、どうやらそれは奥の御諒解を得られなかったようです。それで、その件は一旦保留となりました。その後、御公務を含めた御負担の軽減の話が具体的に動き出したのは、平成二十四年に入ってからです。その内容について、全部ではありませんが先の案が実施される運びとなりました。本論に入る前に、今回のビデオメッセージにまつわる私の記憶をお話しさせて戴きました。それでは、これより本論に移ります。



◆宮中祭祀について

「宮中祭祀」は「皇室祭祀」とも呼ばれますが、大きく二つに分けることができます。まず一つは、古い伝統を保持しながら連綿と継承されてきた中で明治の初頭に大きく変化したもの。そして、もう一つは終戦後のものです。初期の頃の祭祀については今回の勉強会では割愛させて戴いて、ここでは明治に入ってから伝統ある祭祀がどのように変化してきたのかを見ていきます。

「宮中祭祀」とは、「天皇が賢所、皇霊殿、神殿のいわゆる宮中三殿、また神嘉殿、そして山陵で、御祖先また神々に深謝され、国家の安泰、国民の福祉、更に広く世の平らぎを祈念される祭祀」と定義出来るでしょう。年間を通して陛下が宮中でたくさんのお祭りに奉仕されているのは皆さんも御存知の通りです。宮中祭祀には、年中恒例の祭祀だけでなく、臨時の祭祀も含まれます。祭祀の起源や沿革は古典や宸記（天皇陛下がお記しになったもの）、古記録に残されています。歴史書を見ると、応仁の乱な

ど都や宮中が荒廃するに伴い皇室祭祀が衰微した時期もあるようですが、明治に入り新しく国家の諸制度が整備されていく中で宮中の祭祀制度も徐々に固まっていき、明治四十一年九月十八日に「皇室祭祀令」が制定され現在の宮中祭祀の形が出来上がりました。結論から言いますと、この「皇室祭祀令」に準拠して今でも祭祀は行われています。それというのも、当時はこの「皇室祭祀令」を基にお祭りが斎行されていたのですが、終戦後の昭和二十二年五月二日にこの法令は廃止されています。しかし、「これに変わる法令は当分の間は出来ない」ということだったので、翌日の五月三日付の宮内府文書課長発の依命通牒により以下のような通達が出されました。通達の内容は、簡単に言えば「以後新しい法令が出来るまでは、これまで同様に『皇室祭祀令』に準拠してお祭りをを行う」という内容です。しかしながら、今日に至っても新しい法令がまだ出来ていないため、現在でもこの法令に準拠して祭祀が行われているわけです。

◆宮中祭祀の理念について

次に、「皇室祭祀令」の制定に至るまでの神祇官祭祀と宮中（内廷）祭祀について見ていきます。神祇官祭祀が、その後、宮中祭祀と共にどのように確立されていくかは非常に興味があるところです。神祇官とは太政官外に特立するものと位置付けられています。明治二年十一月に太政官制度局で作成された「年中祭儀節会大略」には、神祇官祭祀形成期の只中において神祇官以後の国家祭祀をどのように導いていけばよいかということを神祇少副である福羽美静ふくばよしずが記しています。後に、この福羽が宮中祭祀の制度のほとんど全てを確立していきます。彼は律令の造詣に深く、律令を軸にして明治の神祇制度を確立していききました。その概略が示されたものを二点紹介します。

まず、「年中祭儀節会大略」では、宮中における天皇親祭こそが祭政一致の具現化に他ならず、これを實現するためにはお祭りの施設として宮中に「大齋場」

を設け、従来の神祇官祭祀の全てをそこで行うことだとしています。「大齋場」構想とは、伊勢の神宮と熱田神宮、この神器奉斎の二社を宮中に移して神殿を作り、そこでお祭りをするという考え方です。こういう構想が明治初頭にはあったのですが、実現することなく明治十年頃にはなくなったようです。神器の二つを陛下のお手元である皇居に移し、それらを祀ろうとする大構想は、この段階で潰れてしまっています。

しかし、宮中祭祀の理念として、初代神武天皇や明治天皇の先帝である孝明天皇など皇室の祖先を祀る皇祖の祭祀を宮中祭祀の主軸として基本に置くことが福羽の宮中祭祀に対する考え方であったことは、まず間違いないと思われます。

その福羽の考え方は、明治四年に制定された「四時祭典定則」の中にも見る事が出来ます。定則を見ると、「神祇令」などを参考に宮中祭祀を定めていったことが分かりますが、定則では、「大祭（親祭）」として、元始祭、皇大神宮遙拝、神武天皇祭、孝明天皇祭、新嘗祭の五つを挙げています。「大祭（親祭）」

とは、陛下自らがなさるお祭りのことですが、その中に神武天皇祭や孝明天皇祭を入れているところをみれば、宮中祭祀では皇室の祖先を大変敬っていることが分かります。

明治四十一年に「皇室祭祀令」が出来るまでは、明治四年の「四時祭典定則」に基づいてお祭りが行われてきましたが、ここで注目すべきことは明治三十二年に「帝室制度調査局」が設けられたことです。この局は、皇室に関する諸制度の本格的な調査と法制化すべき事項の法案を起草することを目的として、伊藤博文を総裁として設置されました。そして、伊藤は御用掛の伊東巳代治いとうみよじを副総裁として任命し、彼が事実上の推進役となった頃から本局は本格的に動き出します。局員は、梅謙次郎はづみよかつか、穂積八束、岡野敬次郎、奥田義人おくたよしん、有賀長雄、この有賀長雄という方は当時の法令の第一人者です。「木喜徳郎、花房直三郎、多田好問ただこうもん、この多田好問という人は故実に精通しており、宮中祭祀にも深く関わった方です。こういう人たちが伊藤の下で調査を行い、宮中祭祀を法制化し

て整備していきました。本局がどのような法令を作り上げていったかを見ると、明治三十九年六月十八日時点で上奏済みの諸案は「皇室典範増補」、「華族令」、「皇室陵墓令」など二十以上の法令を挙げるものが出来ます。このように、宮中祭祀に関わるほとんど全ての法令を「帝室制度調査局」によって伊藤が作らせたと言えるでしょう。

そして、その法令の中に「祭祀令」があります。この「祭祀令」には、宮中における祭祀のほぼ全てが網羅されています。しかしながら、その中に唯一、喪儀令だけが含まれていません。これには逸話が残っていました、明治天皇様に時の宮内大臣が葬儀に関する法令案を持参したところ、陛下が「これは我が葬儀の案件か」と一言書き足されたそうです。それで大臣はそそくさと帰ってきたという話です。そういうわけで、明治天皇の御葬儀は当時は法律の根拠がない中で行われました。

また、「祭祀令」は他の法令と違い宮内大臣の署名一つで終わっている法令です。これについて「帝室制度

調査局」の主査である有賀長雄が「皇室弁」の中で触れています。有賀は「皇室祭祀令」起草に関わる基本的指針を表した上で、祭祀に関わる事務は天皇の「国神の祭主」としての地位より出ずるものにして、「国の元首」としての地位より出ずるものではない。すなわち「皇室祭祀令」は府中の国務に関する規程ではなく、あくまでも、宮中の宮務に関する規程であると記しています。この辺りをどう解釈されるかは、皆さんに委ねたいと思います。

◆宮中祭祀の具体的内容について

次に、宮中では具体的にどのような祭祀が行われているのか、平成十七年の一年間を通して見ていきます。この平成十七年は、海外に二度御訪問なされるなど陛下にとって非常にお忙しい年でした。

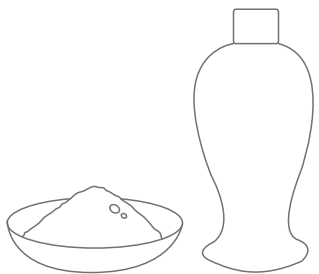
年が明けて、一月元旦は四方拝を行います。陛下の出御は午前五時二十五分ですので、出御の一時間前の午前四時半頃には潔斎を済まされ御所をお出にな

らなくてはなりません。陛下は、宮中三殿の北の方にある綾綺殿でモーニングから装束にお召し変えされて、時間になりましたら掌典長の案内を受けて午前五時二十五分に出御し、神嘉殿の前庭で四方拝を行います。四方拝に続いて、陛下は宮中三殿にそのまま向かわれ、廊下を進み、賢所・皇霊殿・神殿の御三殿にて歳旦祭をお務めになられます。歳旦祭は大体二十五分程で終わります。

その間、我々はどうしているのかと言いますと、陛下の出御の約二時間前には宮中三殿の候所に入ります。陛下が御所をお出になられる一時間前には既に我々はお祭りを始めていることになります。宮中三殿のお祭りは神社のそれとは異なり、必ずしも祭典を奉仕する全員が揃ってから始めるという訳ではありません。宮中祭祀は陛下が出御される時間が始まりの時間という形で記録されますが、実際に祭りが始まっているのは陛下が出御される一時間前です。出御の一時間前に我々掌典が候所を出発し、御殿に上がって献饌（お供えもの）をします。そして、掌典長が祝詞を奏

上した後に、皇族・参列員が御三殿庭上の幄舎に入られ、それから陛下の出御をお待ちするという順で祭りが進みます。我々は御殿の上から皇族の方以下、参列員が全て揃ったか確認し、三分前に掌典長へ合図をします。それを受けて掌典長は一分前に陛下へお言葉をかけます。そういう分刻みのスケジュールで祭りは行われています。それが二年間続いていくのです。

実は、これまでお話ししてきたような、陛下が宮中三殿にお参りされるお祭りというのは、我々にとっては極限られた機会であります。陛下が自らお祭りなさる以外にも、祭事に関わる多くの関係行事があります。例えば、新嘗祭について見ていきます。十一月二十三日は新嘗祭の当日ですが、新嘗祭に対する陛下の間接的な係わり方の中に新嘗祭に使われるお米や粟は全国から献上されます。我々はこの



お米や粟を受納式という形で三回に分けて献上を受けています。この受納式の後に、陛下は献穀者に拝謁を許されています。こういうことは、もちろん宮内庁のHPには載っていませんし、表にもあまり出てこないことなのかもしれません。しかし、そういった表には現れない部分も多くあります。新嘗祭のような大きなお祭りは我々掌典だけで到底行うことは出来ませんので、祭典に先立って奉仕団をお願いし、御殿外のお掃除から細々としたことも含めて祭典の準備、片付けを手伝って戴いています。そういう奉仕団に対しても陛下がお言葉をおかけになられることが慣例です。また、新嘗祭に際して献穀戴いた各県ごとの作物（米・粟）を陛下は全て御覧になられ、それぞれの銘柄や今年の出来などを確認されます。珍しい銘柄のものがあれば、これは献上を受けた時に献穀者から何か言葉がありましたかなどと掌典長に尋ねたりされます。このように宮中祭祀は、陛下が当日のお祭りに奉仕していることだけで成り立っている訳ではないことを知っておいて戴きたいと思います。ここでは、新

嘗祭のお祭りだけを取り上げてお話ししましたが、これだけでも宮中祭祀がどういうものであるか皆さんにも少しお分かり戴けたかと思います。

宮中では年間を通じて様々なお祭りが行われています。もちろん、新しく出来たお祭りもあり、殊に皇祖のお祭りは明治になってから出来たものです。しかし、一方で古くから今日まで続くお祭りも宮中祭祀にはたくさん残っています。最も古いものでは、律令の時代まで遡ることが出来るでしょう。

◆陛下のお言葉について

次に、平成二十八年八月八日の「象徴としてのお務めについての天皇陛下のお言葉」を抜粋しました。先の陛下のお言葉の中で唯一祭祀に関わることをお述べになられたと私が感じた箇所を示します。

「天皇が健康を損ない、深刻な状態に立ち至った場合、これまでも見られたように、社会が停滞し、国民の暮らしにも様々な影響が及ぶことが懸念されま

す。更にこれまでの皇室のしきたりとして、天皇の終焉に当たっては、重い殯りの行事が連日ほぼ二ヶ月にわたって続き、その後喪儀に関連する行事が、一年間続きます。その様々な行事と、新時代に関わる諸行事が同時に進行することから、行事に関わる人々、とりわけ残される家族は、非常に厳しい状況下に置かれざるを得ません。こうした事態を避けることは出来ないものだろうかとの思いが、胸に去来することもあります。」

このお言葉を祭祀という観点から考えると、具体的には「大喪儀」と喪明け後の宮中祭祀としての「連のお祭りである「即位礼」、そして「大嘗祭」などを思召されての発言であるのかなと思われる。「皇室祭祀令」には葬儀の定めはなく、葬儀は宮中祭祀の範疇には含まれず、宮中祭祀に関わる掌典以外の祭官が別途執り行うものです。しかし、天皇の崩御ということになると、まず「喪儀令」にある大葬儀が行われますが、陛下のメッセージにあるように、これは二か月、三か月と続いていきます。昭和天皇崩御の大葬儀を



見ると、「崩御」、「拝謁」、「御船入」に始まり諸祭が五十日間続きます。五十日祭が終わると一段落し、百日祭があり、一年祭があつて、やっと喪が明けます。しかし、喪が明けた途端、今度は新帝の即位に関する儀式が始まります。これは、「賢所に期日報告の儀」を皮切りに、主なもので十六に亘る諸祭が続いていきます。こういった祭祀が喪が明けてから行われ、即位礼、そして大嘗祭へと続いていき、最後には伊勢の神宮への御拝礼が行われます。こういうことを念頭に置きながら、陛下は大変な行事であるということ述べられたのではないのでしょうか。

◆「皇室祭祀令」の変遷について

最後に、「皇室祭祀令」に触れます。明治四十一年九月十八日公布、改正は昭和二年です。この昭和二

Q2

陛下について、国民があまりにも知らないことが多いのではないのでしょうか。三種の神器

私が宮内庁でお勤めしていたのは一昨年前までです。昨年のお言葉の時はもう退職していて現場にはいませんでした。これは、あくまで私が宮内庁にいた時に感じたことですが、このようなお言葉が出ることは私自身全く感じしておりませんでした。もちろん、掌典職というのは国家公務員ではなく、内廷の職員でありますから、知ることが出来る情報も限られてはいます。確かに、今回のお言葉が出る前から、陛下自らが御葬儀について多少言及されたことを考えれば、陛下から何らかのメッセージが出ているのかなと感じることはありました。

A1

いますが、先のお言葉についてどのように考えていらっしゃいますか。

A2

や剣璽御動座など国民はほとんど分からないのではないのでしょうか。宮中祭祀を続け、国民の安寧と国家の安泰を祈り続ける陛下の存在そのものを国民はもっと学ばなくてはならないと感じていますがどう思われますか。

まず、宮中祭祀は陛下がなさる祭祀です。で、その内容を一般に公開してより広く知ってもらおうという考えは掌典職内には一切ありません。ある時、宮中祭祀の取材を受け、宮中祭祀を奉仕する陛下のお姿をテレビカメラが初めて動画として映すことになりました。我々としては、この動画を間違った形で使われるのが一番困るということで、宮中祭祀についてどこまで撮影を許可するのかという話し合いがなされました。そうしたところ、侍従を通じてですが陛下のお話しとしておおよそ以下のような内容が伝わってきました。「陛下は、宮中祭祀に

年は明治祭が新しく加わった年で、それを受けて改正されました。さらに大きな改正は終戦時の昭和二十年です。この改正の際、第二章大祭第八条「大祭二八天皇皇族及官僚ヲ率キテ親ラ祭典ヲ行フ」という条文が真っ先に削除されたようです。敗戦直後ですから「官僚を率いて天皇が祭典を行うことは問題あり」ということだったのでしょう。また、剣璽御動座が行われた昭和四十九年の翌年にあたる昭和五十年にも大きな改正が行われました。剣璽御動座が行われたことは非常に喜ばしいことですが、これに対して反論が挙がりました。宮中祭祀に公務員が関与する事、つまり侍従とか女官にまつわる問題が提起され、それが一気に広がってしまい、様々な点で変更を余儀なくされたのです。陛下に何かあった時は、昭和五十年までは侍従が毎朝陛下の代わりに賢所に参りまして、賢所で装束をあらためて宮中三殿の殿内に入ってお参りしていました。しかし、これに対して、公務員たる侍従が御殿の中で祭祀に類するような行為を行うことはけしからんという声が上が

Q1

先の陛下のお言葉の公表のされ方が自然ではなかったように感じています。陛下と国民の間のコミュニケーションの難しさを感じて

質疑応答



がり、それ以降は侍従が装束を着けて殿内に入ることはなくなりました。今は御殿の階下からモーニングで毎朝侍従が拝礼しています。

また、これに関連して、陛下に何かあった時の御代拝についても変更がなされました。恒例のお祭りの御代拝については、それまでは大祭の場合は掌典長が、小祭の場合は侍従が行っていましたが、これも変更になりました。大祭の場合はこれまで通り掌典長が行いますが、小祭の場合は掌典次長が行うということに変更されました。宮中祭祀も時代と共に変化していることの表れだと言えるでしょう。

ついてオープンにすることを嫌がっておられるということはない。陛下は宮中で行われているお祭りを敢えて隠すという考えはない。」この言葉について感じることは人それぞれだと思います。私自身は、陛下は宮中での奉仕に誠心誠意、全身全霊をかけて臨んでおられるというお考えがあるからこそ、何も隠すことはないと感じておられるのだらうと思いました。

Q3

装束について、宮中祭祀では和装と洋装の服制についてどのように考えているのでしょうか。

A3

祭祀の観点からみれば、即位に関しては伝統に則った服制を出来るだけ守っており、特に大きく変更されたことはなかったと記憶しています。私自身は即位の時は宮内庁に勤めておりませんでしたので現場にいませんでしたが、記録を見ましても服制については大正や

Q4

明治の時と大きな変化はなかったように思います。おそらく、これからも服制については大きく変わることは考え辛いでしょう。しかし、儀式そのものの変更については、何とも言えません。

A4

先生のお話を聴かせて戴き、宮中祭祀は祭祀だけでなくそれにまつわる神事が膨大であることも理解出来ました。しかし、これだけのことを天皇家は過去からずっと行ってきたのでしょうか。これだけの祭祀を行うことは大変です。宮中祭祀の中で削減出来るものもあるのではないのでしょうか。確かに、古より連綿と続けられてきた祭祀なら削減は出来ないでしょう。しかし、そうとは限らないような歴史も伺うこともあります。

現在の御葬儀は神葬祭に準拠した形で行われていますが、このような形で行われるよう

は言えないと思います。

Q6

宮中祭祀は皇祖へのメッセージであると考えられると、宮中で行われる祭祀は一般的に公開される性質のものではないような気がします。そうであれば祭祀の二つに意味があると思いますので、公務軽減という命題の下に宮中祭祀を減らすべきではないと思います。

Q5

宮中祭祀の中で最も古いものはどれでしょうか。

A5

これについては非常に難しいところです。宮中祭祀は調べれば、律令の時代まで遡ることは出来ます。四方拝の記録については、相当古いものが残っていますが、最も古いものと問われるとなかなか判断は出来ません。代表的なものとして新嘗祭と御神楽は宮中祭祀の中で最も古い形を継承しているものだと思いますが、やはりどれが一番古いとは明確に

A6

まず、個々のお祭りの内容に関しては私たちも全てを承知しておるか疑問な点もあります。例えば、新嘗祭では祭りが行われる母屋に入ることが出来るのは陛下と采女^{うねめ}という女性だけです。我々掌典も中で何が行われているのか伺い知ることは出来ません。それについては宮中祭祀に参列したある総理が「陛下が何をやっていたのか全く見えなかったよ」と長官に呟いたという話が残っています。その話しが示すように、宮中祭祀は広

く一般に公開されるものではありません。年間を通して宮中祭祀が公開されることはほぼありませんが、例外的に御結婚の時などは公開されたりします。さきほど話したテレビの取材の件も、陛下がお祭りに向かう参進の時、廊下を歩く姿をカメラに収めた只是因为、広く一般に祭祀を公開するものではありません。

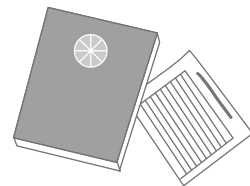
Q7

陵墓について、はじめは天皇后両陛下が合葬されると発表されましたが、後に皇后陛下が合葬を遠慮されるなど内容が二転三転しました。陵墓についてどのように考えたいのでしょうか。

A7

天皇の陵墓については「皇室陵墓令」で寸法等が全て決まっていて、それに則って作られます。陛下がそれほど大きなものをつくる必要はないのではないかということを仰られます。

たが、それは陛下の想いをお示しになられたということでしょう。ただし、陵墓は祭祀場でもありますので、お祭りを行うスペースは確保しなくてはならず、一定の大きさが必要だと思います。陵墓について「陛下と皇后陛下と一緒に」という発言がありました。後に皇后様からもつたいたいという言葉があつて合葬の件はなくなりました。



山田 蓉先生 御略歴

昭和二十年生まれ。岡山県出身。昭和四十三年皇學館大学文学部国史学科卒業。卒業後、熱田神宮宮掌・権禰宜・禰宜、宮内庁掌典職掌典・掌典次長を務め、現在は神社本庁嘱託、皇學館大学非常勤講師。熱田神宮奉職中は博物館学芸員として文化財の調査研究に従事。専門分野は宮中祭祀。

神道政治連盟国会議員懇談会活動報告
「皇位」と「象徴」―皇室の制度を考える―

発行日 平成二十九年六月十日

発行人 神道政治連盟国会議員懇談会

神道政治連盟

一五一〇〇五三

東京都渋谷区代々木一―一二

TEL 〇三―三三七九―八二八二

